

最新

Fintech⁺ (28)

三根 公博

「下町ジェネリックロマンス」—懐かしさは恋と同じ—

東京・浅草。雷門からの仲見世通りと交差する伝法院通りに軒を連ねる商店群が、2026年の夏までに姿を消すという。長年、浅草の門前を彩ってきた32店舗が閉じる。報道によれば、商店側はかつて台東区から使用許可を得たと主張していたが、区側にはその記録が残っておらず、交渉は長く並行線をたどっていた。店主の高齢化も進み、営業の継続が難しくなったこともあり、最終的に立ち退きに合意したという＝写真。

浅草といえば、今や外国人観光客の定番スポットである。けれども、参拝客が絶えない華やかさの裏で、古い店の暖簾が静かに下ろされていく。風景の移り変わりは都市の宿命だとしても、どこか胸の奥がざわつくのはなぜだろう。長い年月のあいだに、通りや建物には人の記憶が染み込み、街のものが“生き物”のように息づいているからかもしれない。

本年3月の本稿で香港の「九龍城砦」に触れた際、筆者はその退廃的な魅力を描いた映画「トワイライト・ウォーリアーズ」を紹介した。あの映画の余韻はいまだ強く、ひいては香港映画全体への関心が高まっている。奇しくも同時期に人気を博した漫画「九龍ジェネリックロマンス」では、主人公が「懐かしいって感情は恋と同じ」と語る。過ぎ去ったものへの郷愁が、失われゆく街並みに重なる。

東京ではいま、大規模再開発が次々と進む。麻布台、八重洲、渋谷、新宿、池袋——高層ビルが林立し、古びた街並みが消えていく。浅草の門前商店のような風景は、大小さまざまな形で日本中から姿を消しつつある。もちろん、清潔で安全な都市空間を整えること自体は否定できない。同時に、どの街も同じ顔をした「効率のよい都市」になっていく淋しさもある。

香港やシンガポールの都市景観を思い浮かべると、超高層ビ



ルの谷間に、アジア的な猥雑さや人間臭さが生きている。そこには“均質ではない魅力”がある。人が行き交い、声を交わし、匂いや湿気すら街の記憶の一部となっている。経済成長と近代化の中で、彼らはその雑多さを完全には捨てなかった。だからこそ、訪れる者の心を惹きつけてやまないのだろう。

整然とした都市空間だけでは、人の心は長く留まらない。利便性の裏には、どこかで“偶然の出会い、や“予期せぬ混沌、が必要なのだ。

神田や秋葉原のガード下のトンカツ屋、下北沢駅の再開発で消えた路地裏の喫茶店——そういう典型的な昭和の景色も、また「今はもう亡きもの」への恋である。

一度失われた街の風景は、どれほど再現を試みても同じ形では戻らない。人が住み、働き、語らい、そこで時間を積み重ねてきた“気配”が、都市の本当の資産だったのだと思う。私たちは経済的価値や土地の効率を重視するあまり、その見えない資産を軽んじてはいないだろうか。街は単なる空間ではなく、人の感情の器でもある。

筆者は、シンガポールのマリナーナ・ベイ・サンズや、横浜のみなとみらいよりも、「ブレードランナー」の「二つで十分です」の屋台のオヤジに惹かれる。そこには、人の欲望と記憶が交錯する生々しさがある。合理化の果てに漂う退廃の美学は、失われた街への鎮魂でもあるのかもしれない。

そしてその退廃にこそ、私たちが忘れかけている“人間の不完全さの美”が潜んでいる気がする。

再開発の進む東京を歩くたびに、ふと聞こえる昭和のメロディーや、下町の老舗の看板の文字が、まるで過去からのささやきのように思える。

懐かしさは恋と同じ??報われないからこそ、私たちはその街に、何度でも心を寄せてしまうのだ。